



学生時代を振り返って

川上 則 雄*

就職して初めての正月を田舎で迎えることになりました。岡山までの切符を買って新幹線に乗り込むと、大晦日だというのに意外に車内は空いており運よく指定席を取ることができました。先はまだ長いとコートを脱いで座り込み、おもむろにタバコを取り出しいつもの如く気取ってふかし始めました。何度となくやめようと思っているタバコですが、頭が空っぽになっている時にはこれが以外に似合ったりするので。岡山で伯備線に乗り換えバスを二回乗り継ぐと愛しの我が家です。文字通りの田舎です。大学入学当時は在来線を乗り継いで帰ることが多く、Homeward Bound なんかを口ずさみながら、風情を自分で作り出して帰省を楽しんだものです。新幹線にはそういった自己陶醉を引き起こすような雰囲気はありません。しかし、帰省という言葉が醸し出す一種独特の雰囲気に包まれるという点では新幹線も在来線も区別は無いようです。子供連れのおばさんも、ちょっとつっぱったにいちゃんも皆何となく和やかな顔をしています。そうこうしているうちにウトウトし始め、とりとめのない事が次から次へと頭の中を駆け巡りだしました。小さい時のこと高校時代の事、大学に入ってからは……。何故物理に手を染めるようになったのだろう……。

大学に入学した当時の日記をペラペラとめくってみると、意外なことにも「大学院まで行って頑張るぞ。」と思わず赤面しそうな文章が目につき苦笑いしたこともありました。何を頑張るのかは全く書いてありません。おそらく大学に入りたての誰もが持つ気負いから出た言葉なのでしょう。そういった期待に反して大学での授業は全く面白くありませんでした。特に教養の授業といったら、高校での社会科の授業のい

やな印象を彷彿させるのみでした。という訳でほとんど授業には出ず、たまに出るとしても必ず小説を持参してゆき教室の後ろの方で読み耽っていました。毎日が無為に過ぎてゆき、常に物足り無さを感じたのがこの教養時代です。何かに打ち込み充実した毎日を送るだけの時間は十分に持ち合わせていましたが目標が見つかりませんでした。もう成人式を迎えようとする一人前の人間としてあるまじき態度かもしれない。周りの人を見ても大部分の人はそれに近い生活をしているような気がして、大学は人間を墮落させるのみだと極論的な考え方をしたこともあります。ある人にとっては、こののほほんとした時期が長い人生の充電期間になるのかもしれない。しかし、ぬるま湯につかり過ぎると完全に毒気を抜かれてしまう。そんなぞら恐しい時期でもあるような気がします。

気がついてみると大学も三年の半ばになっており、これまでの自分の生活に対する鬱憤がはちきれんばかりに増大してきました。何かしないと崩れてしまう、そんな気持ちです。まずは授業に出てみよう、せっかく大学に入ったことだし。このころから眠い目を擦りながら授業に出てノートを取り始めました。記憶に残る範囲でまじめに授業を聞いたというのはこれが初めてのことでした。授業は依然として面白くなかったのですが、それまで感じていた虚脱感めいたものは何とか払拭できました。大学がそれなりに面白い所だと感じられたのは四年になり卒研のテーマが与えられてからでした。自分なりの稚拙な考えを出して試行錯誤を繰り返す、こんなプロセスにそれまでの刹那的なものとは違った面白さが出てきました。積極性に起因した面白さなのでしょう。それまでの自分の為す事といったら受け身のものが多く、既成のものを選り好みし吸収しようという立場であったよう

*川上則雄 (Norio KAWAKAMI), 大阪大学, 工学部応用物理学科, 助手, 工学修士, 物性理論

に思います。そんな受け身な態度で物事に興味を持とうなど甘すぎると言われればそれまでですが、意外に自分の周りにもこれに似た状況がゴロゴロしています。

大学院に入ってからには瞬く間に時が過ぎ去り、その間のでき事を時間の順序に並べることが難しいくらいです。ある意味では没頭できる対称が見つかったとも言えますし、またある意味では何も考えなかったとも言えます。本人としては前者であることを願っています。この時期には大学で感じたような虚脱感はありませんでしたが、違った事で悩んでいました「応用物理で理論物理をやれるのかしらん。理学部に移った方が良いかも」。こんな戸惑いを振り切るように本を買集めて、がむしゃらに勉強したのもこの時期です。今では応用物理における理論物理というものを世間の人に認識してもらいたいという気持ちも生まれ、応用物理学科における研究生活を何とか自分のものにして捉えることができるようになりました。

大学での勉強不足は大学院に入って痛感し、大学院での悩みは大学院を出てやっと解決するというふうに、自分の頭の中がすっきりし物事に対する自分なりの考えがまとまるのは少し時期をおいて第三者的立場から自分を見ることができてからのような気がします。事態に直面している時、あるいは与えられた環境の中に頭までスッポリとつかっている時には、ただがむし

ゃらに進んでみたり反抗してみたり、混沌としたままいたずらに時間が経過してゆきます。ふと気がついて過去を振り返って見ると、いつの間にか、しかしながらはっきりと自分の足跡が残っています。それが良いものにしろそうでないにしろ、その足跡の一つ一つに何か意味を持たせないと淋しい気がして、反省してみたり、自分の生き方をこじつけてみたりする訳です。

こうした混沌とした状態は現在も進行中であり、自分は何故研究職に就いたのか、さらには何故物性理論を専攻しているのか、大学時代まで遡っても理由は分かりません。数年も経つとそれなりに理由をこじつけているかもしれませんが、理由はさておき現状を是認するなら、物理は自分にとってとても面白い対象物だということです。勉強することは小さい頃から全く変りなく嫌いですが、物事が少しでも自分なりに理解できるようになる楽しみといったものがそれに少しだけ勝っています。このちょっとしたアンバランスが現在の研究意欲につながっている気がし、このアンバランスを保ってゆくことが研究面に関して最も注意を払わなければならない事のように思われます。

「ブチッ」と音がしました。難かしい事を考え過ぎたので頭がショートしたのでしょうか。バスに乗り換えたら懐かしの我が家です。Home-ward Bound でも口ずさみながら帰ることにします。